平成25年度「総合的な学習の時間」実践報告

「総合的な学習の時間」委員会　平野延行　渋木陽介　田中由紀子　吉岡昌悟
深澤孝之　建元喜寿　粟飯原匡伸　今野良祐

3 年目となる本年度の授業計画の作成にあたっては、これまでの内容を継続しながら、本年度が初年度となる 3 か国選択制の校外学習との関わりを考慮に入れ実施した。これまで実施されている少人数講座プロジェクトワークを踏襲した。この活動を通して、多くの生徒は探究的活動の考え方や方法などについて意義を高めることができた。

キーワード：総合的な学習の時間　課題解決活動　プロジェクトワーク

1.　はじめに

本校では新学習指導要領の告示を受け、平成 23 年度入学生から教育課程の改訂を行い、平成 24 年度の移行期間を経て本年度は新教育課程の完成年度となる。3 年目となる本年度の授業計画の作成にあたっては、これまでの内容を継続しながら、本年度が初年度となる 3 か国選択制の校外学習との関わりを考慮に入れ、さらなる充実をはかることを念頭においた。

2.　総合的な学習の時間の位置づけ

本校の総合的な学習の時間は、2 年次におけるキャリア教育の中心的な役割を担っている。1 年次の「産業社会と人間」「キャリアデザイン」で身につけた探究活動に必要となる基本的スキルと論理的思考力の基盤をもとに、そのレベルアップを図る活動を行う。また、他者（教員や生徒）とのやりとりを通して、自己の価値観を高める機会を提供する学習活動を行うこととされている。これを通して 3 年次「卒業研究」での実践的な問題解決活動の基盤となる技術と能力を育む時間として位置づけられている。

3.　本年度の年間計画

3-1 学習のねらい

本年度の「総合的な学習の時間」は平成 21 年 3 月に告示された新学習指導要領（高等学校）の定める学習目標に準拠して実施されている。「総合的な学習の時間」の目標は以下のとおりである。

横断的・総合的な学習や探求的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の在り方生き方を考えることができるようにする。

本年度はこれらの目標とする力の中でも「自ら課題を見付け」の部分、つまり「問題発見」をする力に重点を置いた。これは本校の教育課程のなかで前年度、つまり当該学年が 1 年次の際に行われた「産業社会と人間」「キャリアデザイン」で 学習の基礎となる能力と目的意識の涵養に重点を置いたことを踏まえ、なおかつ 3 年次の「卒業研究」の内容を見据えて、これまでの学びをさらに発展させ、キャリアデザインの反省及び前年度前々年度の取り組みの反省からこの力（問題発見力の向上）に重点をおいたのである。[1]

3-2 授業日程ならびに内容

以上の目標のもと、前年度に引き続き、各担当者毎で少人数講座を行うプロジェクトワークを行った。本年度は 3 カ国選択制の校外学習との関わりから全体のテーマを「日本を知る」とし校外学習の事前学習を同時に担うものとした。プロジェクトワークのテーマを表 1 に示す。また、各講座の概要と年間の反省に関しては末尾に資料として付した。

プロジェクトワーク実施は原則として隔週の土曜日、各 3 時限を配当した。また、期間は 4 月～10 月の全 36 時間を設けた。最後に発表の場を設け、学習成果を共有した。

---

[1] この能力は生徒に対しては「粘り強く「日々、学び続ける力」」として提示されている。前年度の「産業社会と人間」「キャリアデザイン」の実践の中では、「キャリア」を生きるための共通の力として、1、粘り強く「日々、学び続ける力」2、「問題を発見する力」3、問題の解決を目指し、他者と「共有する力」を 3 つの力として提示し、これらを探究活動に必要となる基本的な力と定めたのである。生徒に提示した本年度の目的と「キャリアデザイン」との連結については本稿末尾に資料として示す。

4．本年度のふりかえり～アンケートの分析から～

本年度の各講座の実践に即したふりかえりは、本稿末尾に付された資料をご確認いただきたい。ここではアンケートに基づいて、「総合的学習の時間」全体の概況を考察する。

4-1 アンケートのねらい

アンケートはⅠ．取り組みへの自己評価、Ⅱ．学習内容、Ⅲ．学習成果の3部の構成から成り、Ⅰは「キャリアデザイン」の定める目標（あるいはキャリア教育の中で求められる望ましい力）に、Ⅱ、Ⅲは前出の平成21年3月告示の新学習指導要領（高等学校）の定める学習目標に準拠して作成されている。各項目の質問内容に関しては本稿末尾に付された実施アンケートをご確認いただきたい。このアンケートを3年間の一連の教育課程の中で実施することで、各項目の生徒の変容を見ることがねらいである。したがって、アンケートの各質問項目は極力変えないようにして実施された。このことは変化を計量できる利点はあるが、本年度の取り組みの実際を見る上では[2]現状にそぐわない点も生じてしまっている。この問題点については今後の生徒の変容を見るための計測のあり方を考える上での課題としたい。

4-2 アンケートの結果

アンケートの結果は本稿末資料〈別表グラフⅠ～Ⅲ〉の通りである。比較の為に当該年次の、つまり平成23年度の「キャリアデザイン」の1、2学期の変遷とともに提示している。表からわかることとして以下の3点を挙げたい。

①生徒の学習内容に対する満足度・自己肯定感は概して高い。（全ての項目で肯定率は70%以上。）
②「平成24年度キャリアデザイン」からの変容を見ると、全体に緩やかに減少している。（生徒の自己肯定感、学習への関心・意欲は減退している。）
③Ⅱ．学習内容の部分（項目が前出の「総合的学習の時間」の目標に即した質問項目）で高い値が出ている。

4-3 結果に対する考察

全ての項目で肯定率は70%以上であり、生徒の学習内容に対する満足度・自己肯定感は概して高いと考えられた。ただし、この数値がどの程度の指標となるかは判断が難しい。

そこで本稿では基準をほぼ同一のアンケートの質問項目と質問内容を持つ過去の授業実践との比較によって求めたい。1つは当該年次が1年次の際に実施した「キャリアデザイン」であり、もう1つは「平成23年度総合的な学習の時間」である。

前者との比較で言えば、②として挙げたように表からは生徒の意識の減退が見られる。興味深いのは、過去の実践にも「自己評価が2年次になって低下した」報告があり、直近のものとして[3]「平成24年度総合的学習の時間」には数点の調査項目について自己評価が低下している報告があった。意欲の低下は、時期としての「2年次」特有の傾向によるところが大きいのではないかと考えられる。したがって、学習の目標に即して「継続した指導に留意すること」は本年度にある程度の達成を見るにしても、「学習意欲を喚起するための工夫」の点で授業改善の必要がある。

もうひとつの指標である後者との比較について述べたい。同じ質問項目、内容で「総合的学習の時間」のアンケートを実施した「平成23年度総合的な学習の時間」との比較を行った。その表が表3である。

結論から言えば、本年度の取り組みはH23年度に比して、全体的に生徒の自己肯定感・満足度が高い。また各項目間の偏りが是正され、より「総合的」な学びとなっているように見える。「平成23年度総合的な学習の時間」は本年度よりも「卒業研究」を意識して、より研究的な内容であった。したがって、「探求的学習」「学び方・考え方」の面でたいへん高い効果が上がっており、単年度の

---

[2] 「産業社会と人間」「キャリアデザイン」の目的に準拠した質問項目が複数あり、本年度の各講座の実態にそぐわない、偏った結果が出る項目がある。具体的には
(ア) Ⅰ．項目全体は「産業社会と人間」「キャリアデザイン」の目的に準拠した学習の基礎となる能力を測るための質問項目。「総合的な学習の時間」では（基づいてはいるが）前年度に比してより研究的内容に移行しているので当然低い数値が出る。
(イ)Ⅲ．Q3「課題発見意識」の項目は質問文が「身の回りにある「問題」に以前よりも気がつくようになったか」であるので、当然講座のテーマによって結果に違いが出る。（たとえば、震災・東アジアなどをテーマにした講座は被災・ボランティア体験、ニュース（領土問題など）などにより切迫感があったことが推測される。また、食事・衣服といったテーマも当然高い数値が出ている。一方で、インドネシアや民話などをテーマにした講座は生徒にとっては「身の回り」の課題としては受け止め難い。）といった点である。

[3] 「…継続的な指導の成果もあったと分析する。その一方で、自己評価が低下した点については、1年次の「キャリアデザイン」の授業よりも高度化した内容、あるいは時間的な課題、学習意欲の問題などが考えられ、今後の課題としたい。」（『平成24年度研究紀要』「平成24年度総合的学習の時間実践報告」（筑波大学附属坂戸高等学校））

授業として素晴らしい成果が上がっている。一方で、その学びが生徒の「在り方・生き方」、つまり1年次「産業社会と人間」での学び（キャリアを見通す視線）と効果的に連結できていない可能性がある。結果としてⅠ．Q4～6の「主体性」を軸とする項目に影響を与えているように思われる。本年度のアンケートが示すのは、本年度の取り組みが、過去の年度に比して「産業社会と人間」「キャリアデザイン」「総合的な学習の時間」「卒業研究」を貫く継続性のある学びに変容していること、また、その主たる要因として1年次での「キャリアデザイン」がある程度の役割を果たしていることを示唆している。

4-4　結論

本年度の「総合的学習の時間」の授業実践を総括すれば、次のようにまとめられる。

① 3年間の継続した学びの発展（学びの継続性）をはかる上で、本年度の「総合的な学習の時間」は効果的に機能している。また、このことは「キャリアデザイン」を施行した新教育課程の成果としても位置づけられるのではないか。

② しかしながら、2年次の学習意欲の減退は毎年の課題であり、授業改善の必要がある。一方で、そのことは学びの継続性をはかりつつ、生徒に新しい刺激を与えて学習意欲を喚起することであり、実施上の困難を予想させる。

③ アンケートのとり方にも改善が必要である。その改善は、変容を見るために質問項目を変えずに、授業の実際にあわせて質問の文言を変える必要があった。

②③に関しては今後の課題としたい。

〈表１〉プロジェクトワークのテーマ一覧

テーマ
『 普段の食事 』から日本の食と農の現状を知ろう
社会貢献活動を体験し、日本の「今」を考えよう
インドネシアからみた日本を考える
東アジアの中のニッポンを考える
物語の深層～文献学基礎論～
震災以降の東北を考える 3.0
日本のスポーツ文化を考える
日々の生活（衣・食・住）について考える

〈表２〉アンケートの対応項目一覧

Ⅰ 取り組みへの自己評価					
Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	
自己客観	情報の整理	義務の遂行	他者基準充足	CD意識	
Ⅱ 学習内容					
Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6
横断的学習	探求的学習	目標理解	主体的課題発見	主体的思考判断	主体的学習
Ⅲ 学習成果					
Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6
学び方・考え方	在り方・生き方	課題発見力	課題解決意欲	解決への創造性	解決への協働指向

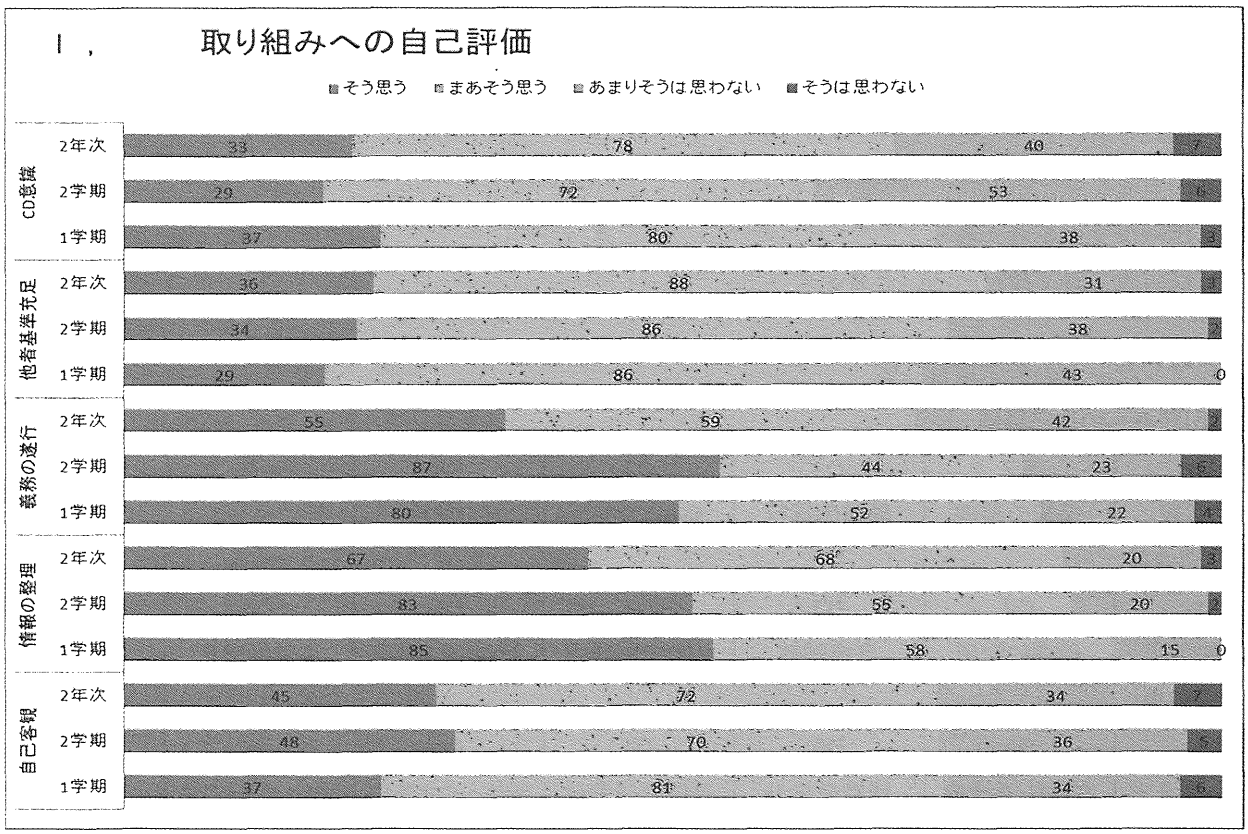
〈表３〉「H23・H25 総合的学習の時間」アンケート結果比較

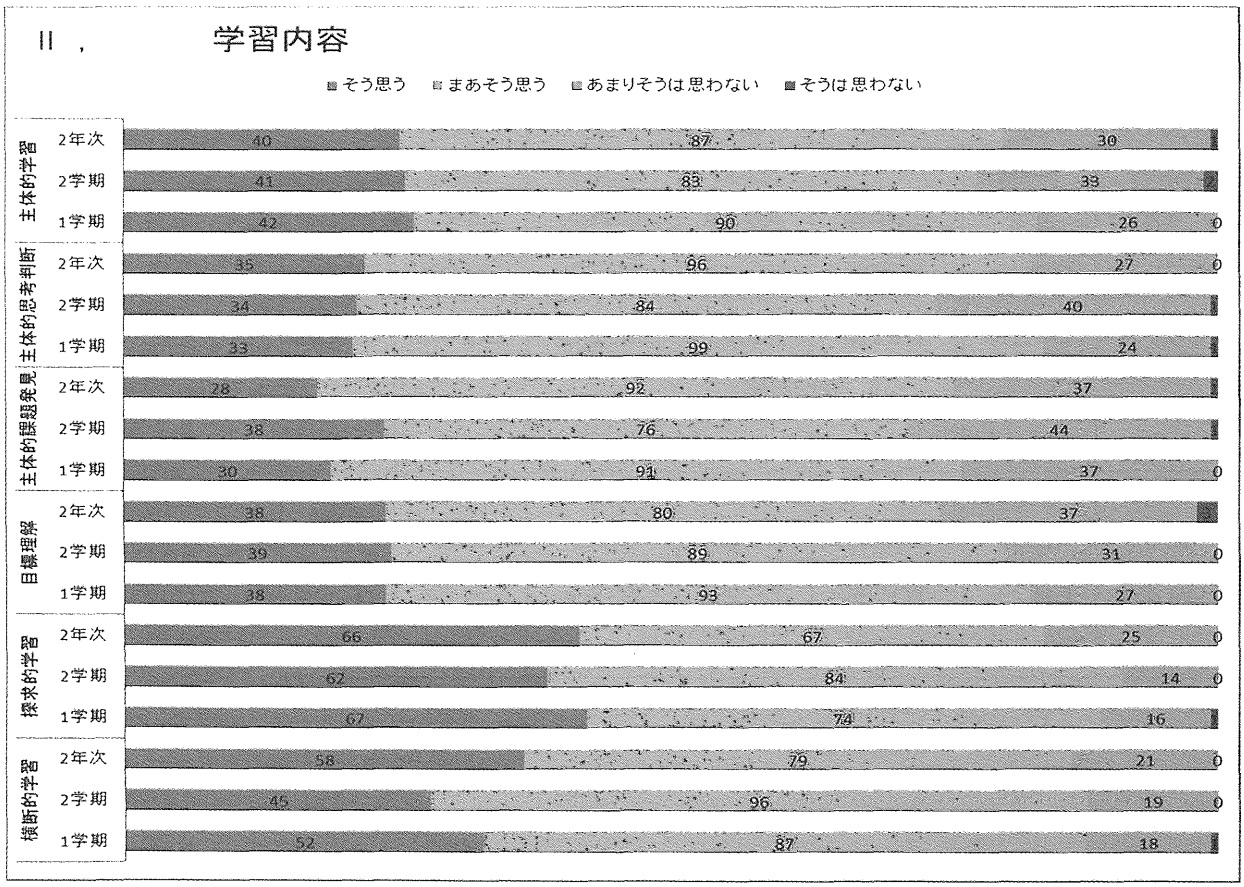
	Ⅰ 学習内容						
	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	
	横断的学習	探求的学習	目標理解	主体的課題発見	主体的思考判断	主体的学習	平均値
H23	79.3%	92.0%	79.5%	72.2%	78.7%	72.0%	79.0%
H25	86.7%	84.2%	74.7%	75.9%	82.9%	80.4%	80.8%
	Ⅱ 学習成果						
	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	
	学び方考え方	在り方生き方	課題発見力	課題解決意欲	解決への創造性	解決への協働指向	平均値
H23	93.4%	68.2%	70.2%	76.2%	76.8%	86.1%	78.5%
H25	89.9%	81.0%	72.2%	79.6%	78.5%	87.9%	81.5%

資料編

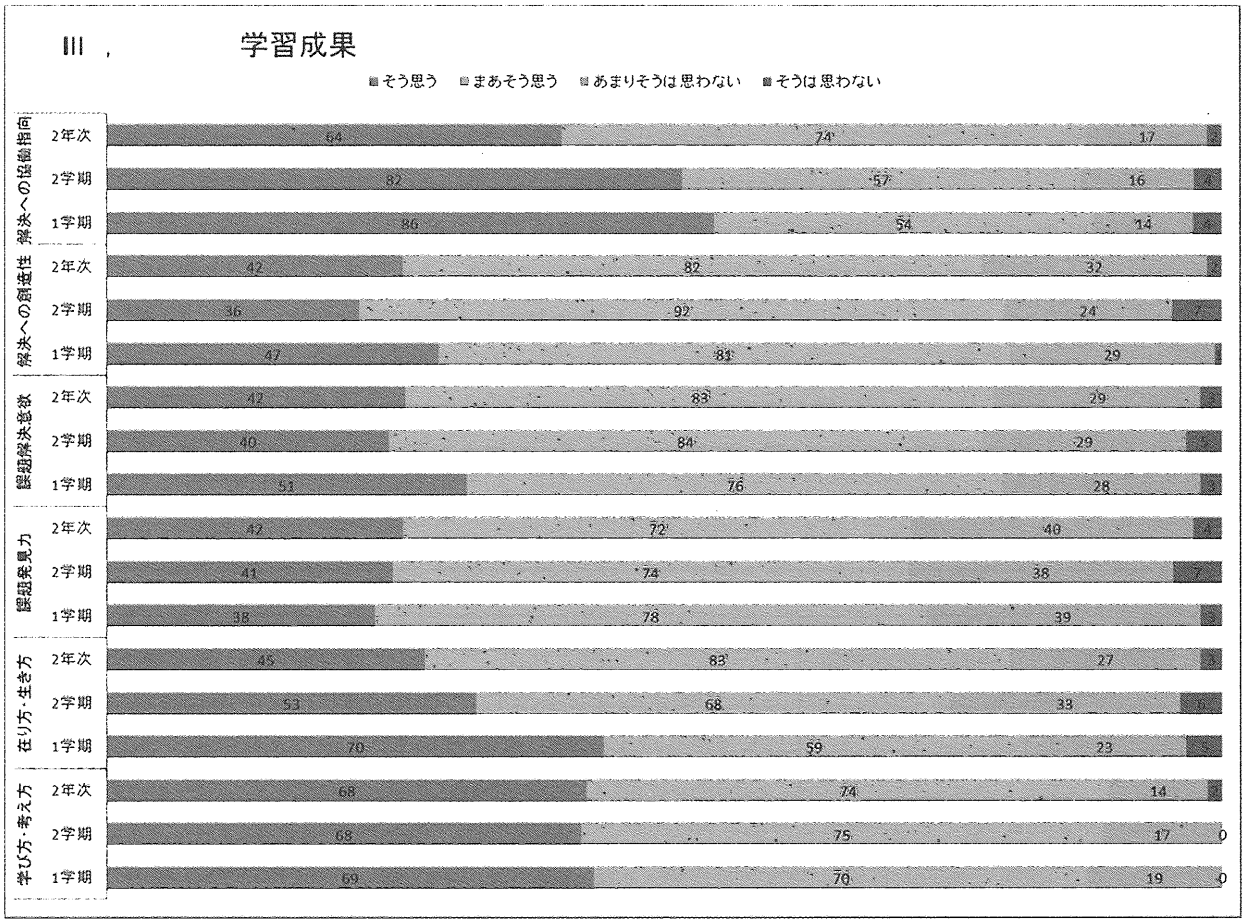
アンケート結果　<別表グラフⅠ－Ⅲ>

表中の１学期２学期は１年次キャリアデザインの１学期２学期のアンケート結果である。





Ⅲ， 学習成果


そう思う
まあそう思う
あまりそうは思わない
そうは思わない
解決への協働指向
2年次 64 74 17 5
2学期 82 57 16 4
1学期 86 54 14 4
解決への創造性
2年次 42 82 32 5
2学期 36 92 24 7
1学期 47 81 29 3
課題解決意欲
2年次 42 83 29 3
2学期 40 84 29 5
1学期 51 76 28 3
課題発見力
2年次 42 72 40 4
2学期 41 74 38 7
1学期 38 78 39 5
在り方・生き方
2年次 45 83 27 4
2学期 53 68 33 6
1学期 70 59 23 5
学び方・考え方
2年次 68 74 14 3
2学期 68 75 17 0
1学期 69 70 19 0

生徒提示資料ーキャリアデザインの目的

＊＊＊＊＊

総合的な学習の時間で養う力

本校では、皆さんに、常に「遠い未来」に何をしたいのか考えて、そこへつながるものとして、「現在」の自分を磨いてほしいと思っています。一年次の「産業社会と人間」で皆さんは、高校卒業後に続いていく自分の遠い未来を考え、そこへつながるものとして、時間割を作成しました。

現在からつながっていく「遠い未来」への毎日を、本校では「キャリア」と呼んでいます。どのような人生（キャリア）を生きたいかは、人それぞれです。しかし、どのような人生であっても、共通して求められる力があります。「キャリアデザイン」ではそうした力を以下の３つの力として紹介しました。

１．粘り強く「日々、学び続ける力」
２．問題を「発見する力」
３．問題の解決を目指し、他者と「共有する力」

実は本校の学習活動はすべてこれらを目指しているといっても過言ではありません。これから皆さんと学ぶ「総合的な学習の時間」でも、３年次で挑戦する「卒業研究」でも目的は同じです。これらの３つの力の学習に継続して今後も取り組んでいきます。

とはいえ、ただ１年次と同じことをするわけではありません。「総合的な学習の時間」ではもう少しだけ高度な内容に挑戦します。特に力を入れたいのは「問題を発見する力」です。「キャリアデザイン」では、これは相当に難しい課題だと紹介しました。ですから授業では先生方が「問題」を設定しました。そして皆さんは、その問題の中から興味ある課題をひとつ選択し、解決を目指しました。でも今回の「総合的な学習の時間」は違います。先生は大きな枠組み（テーマ）だけを設定します。その中で、ぜひあなたの「問題発見」にチャレンジしてみてください。

他の２つの力も引き続き重要です。「日々、学び続ける」こと。これは全ての基本です。そのときそのときに「学んだ」だけ「やった」だけでは、何も生み出せません。やり続け、考え続けることはやはり大事なことです。また、他者と「共有」（協力）しなければ発見した問題を認識してもらうことも、解決することもできません。

あなたの「人生（キャリア）」のために「総合的学習の時間」でも、学び続け、問題を発見し、共有する力を訓練してください。そして、そこで培った力を３年次の「卒業研究」につなげてください。そして、そしてできれば「皆さんの」社会、皆さんや皆さんの周囲の人たちが生活できる社会を「持続可能」なものするための力となることをわたし達は願っています。

＊＊＊＊＊

H25 年度 2 年次総合的な学習の時間「プロジェクトワーク」 課題・提言

○プロジェクト名：1. 食と農から日本を知ろう

○具体的な活動内容

4 月 VTR 学習ー命の食べ方 大量生産の実態と食事のつながりを知る

5 月 朝食、昼食、夕食の調理実習及びフードマイレージ、仮想水、食料自給率の算出する

6 月 映画視聴ー「世界が食べれなくなる日」遺伝子組み換え食品と放射能汚染の問題

VTR 学習ー地球白書 90 億人を養えるか 食料生産の問題と食料消費の問題

一学期のまとめ レポート 普段の食事を環境面より分析する

9 月 校内産小麦でパンをつくる 地産地消のメリットとデメリット

10 月 日本の食料自給率と日本の農業について/これまでの活動の成果発表準備

二学期のまとめ レポート 各自の科目群の学びの視点から食と農の問題に関して貢献できること

○生徒の自己評価集計Ⅰ（回答数）

I. 以下の項目が実現できたと思うか。						
	横断的学習	探求的学習	活動目標の把握	主体的課題発見	主体的思考判断	主体的学習
肯定	20	19	16	16	19	18
否定	2	3	6	6	3	4

○生徒の自己評価集計Ⅱ（回答数）

II. 以下の項目について学習成果があったと思うか。						
	学び方・考え方を学ぶ	在り方・生き方を考える	課題発見力を高める	課題解決意欲を高める	解決への創造性を高める	解決への協働指向を高める
肯定%	21	17	19	16	17	17
否定%	1	5	3	6	5	5

○実践内容の課題と提言

・課題発見力の向上に関して肯定的な意見が多かったのは成果である。生徒にとって身近なテーマであるため取り組みやすかったからであろう。また、生徒の日常ではなかなか見えにくい環境問題を日常の食から分析し、食生活のありかたについて考えたことにより、生徒の日常の中に課題を見つける姿勢を育めたのだと考えている。本校の生徒にとっては、日常の中にある身近な事柄を教材とした取り組みは効果的である。

・活動目標の把握、主体的課題発見、課題解決意欲の向上について課題が残った。これは、常に与えられた資料に対して活動がグループ展開されたことによるものと思われる。個々の日常に個人で目を向けさせ、食生活と環境について考えさせる活動を充実させるべきであった。それにより、主体的課題発見の向上につながり課題解決意欲の向上についても改善が期待できるだろう。

○プロジェクト名：2. 社会貢献活動を体験し、日本の「今」を考え、「未来」を変えよう

○具体的な活動内容

1学期は主に社会全体に目を向け、いま問題となっていること、解決しなければならない課題などについて話し合った。社会には多くの問題があることに気づかせ、その中で自分達が出来ることは何かについて検討させた。自分たちに出来ることの1つとして街頭募金を行った。2学期は学校内で解決しなければならい課題を発見し、その課題解決に取り組む活動を行った。生徒達が設定した課題は、「アスファルトコートひび割れ対策」「先生の居所お知らせ板の設置」「通用門開放時間延長」「お昼の購買メニューの改善」（テーマ名は一部わかりやすいように改編）の4つである。4～5名のグループで1つの課題に取り組んだ。生徒に feel、think、act、share（気づく、考える、実行する、共有する）の 4 つの過程を意識させながら活動を進めさせた。また活動の到達目標についても「must（必ず達成したいこと）」「better（やれたらよいこと）」「best（課題の完全解決）」の3つの段階を設定させた。生徒達は他の授業の課題や学校行事もある中においても、ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄﾜｰｸの趣旨を十分に理解し活動することが出来たようである。

○生徒の自己評価集計Ⅰ（回答数）

I. 以下の項目が実現できたと思うか。						
	横断的学習	探求的学習	活動目標の把握	主体的課題発見	主体的思考判断	主体的学習
肯定	19	17	16	14	17	17
否定	0	2	3	5	2	2

○生徒の自己評価集計Ⅱ（回答数）

II. 以下の項目について学習成果があったと思うか。						
	学び方・考え方を学ぶ	在り方・生き方を考える	課題発見力を高める	課題解決意欲を高める	解決への創造性を高める	解決への協働指向を高める
肯定%	18	18	17	17	16	19
否定%	1	1	2	2	3	0

○実践内容の課題と提言

本活動は公益財団法人日本財団の多大な支援を受けて実施した。また、2学期からは早稲田大学のﾌﾟﾛﾌｪｯｼｮﾅﾙｽﾞﾜｰｸｼｮｯﾌﾟに協力することで、早稲田大学の学生6名、スタッフ2名の方に生徒活動をサポートして頂いた。日本財団から3～4名のスタッフ、授業担当者を含めると各回10名を超えるスタッフによって19名の生徒の活動を支援したことになる。こうした状況であっても数名の生徒が主体的課題発見や課題解決意欲についての学習成果に否定的であったのは残念であると共に、課題解決型学習の難しさも痛感した。また、総合的学習の時間の学習活動の成果を測定する方法、評価の方法については今後の重要な検討課題である。

○プロジェクト名：3.インドネシアからみた日本を考える

○具体的な活動内容

全体を通して、12 月にインドネシア渡航を控えている生徒の事前学習および、9 月の文化祭におけるインドネシアショップの準備の時間にあてた。具体的には、1)インドネシア語学習、2)インドネシアコルニタ高等学校とのスカイプ、3)水田作、4)テンペの試食とテンペ用大豆の播種、4)地域におけるインドネシア探し(ワカバウォーク店内におけるインドネシア製品探し)などである。

○生徒の自己評価集計Ⅰ（回答数）

I. 以下の項目が実現できたと思うか。						
	横断的学習	探求的学習	活動目標の把握	主体的課題発見	主体的思考判断	主体的学習
肯定	11	11	6	11	7	6
否定	2	2	7	2	6	7

○生徒の自己評価集計Ⅱ（回答数）

II. 以下の項目について学習成果があったと思うか。						
	学び方・考え方を学ぶ	在り方・生き方を考える	課題発見力を高める	課題解決意欲を高める	解決への創造性を高める	解決への協働指向を高める
肯定%	12	9	5	10	8	12
否定%	1	4	8	2	5	1

○実践内容の課題と提言

まず、インドネシア校外学習参加者以外の生徒でも、興味のある生徒も参加可能としたが、校外学習に向けた活動も多かったため、モチベーションが上がらなかった生徒がいたのは否めない。また、様々な活動(語学学習、インドネシアに関する講義、テンペの試食や大豆の栽培、文化祭用のお米栽培、インドネシア人留学生との交流)を盛り込みすぎ、また、「先生、僕たちは、インドネシアに行ったことがないので、想像もつきません。」という生徒からの声もあったことから、教員主導で授業を進める場面も多かった。そのため、活動目標の把握、主体的思考判断、課題発見力、解決への創造性を高めるという項目で肯定的意見が非常に低い結果となった。これに関しては、改善の必要がある。ただ、経験不足や、ネットだけによる表面的な理解が多く、個人のなかだけで完結し、他者との協同活動が苦手な生徒が全体的に増えている状況の中、国際教育を進めていくには、ある程度の教師主導の場面は、出さざるを得ないと現状では感じている。

しかし、10 月にコルニタ高校の生徒が 1 か月滞在し、その間に、一緒に合宿したり、12 月に実際に校外学習でインドネシアに渡航した後、1 月にロンボク島の生徒が滞在した際の歓迎会、合宿や交流会では、教員がほぼ見守るだけで、様々な活動を生徒の力で実践できていた。総合的学習の時間、校外学習、その他交流活動をセットで見た場合は、おおむね、授業で目標としていた「グローバルな視野を持ち、様々な人と主体的に協働し、実際に行動できる力をつける」ことは実現できたと思う。次年度以降、2 年次の総合的学習の時間が、どのように展開されるかはわからないが、国際教育を実践する場合は、校外学習と連動した授業計画をたてることが重要であると考えている。

○プロジェクト名：4. 東アジアの中のニッポンを考える

○具体的な活動内容

4/13 講座概要、熟語自己紹介、東アジアイメージのブレインストーミング→ウェビング・カテゴライズ

4/27 講義「日中韓の歴史的展開・交流史」、テーマ分析調査@図書館・PC

5/25「比べて分かる！日中韓のあれこれ」調査報告・ディスカッション①

6/1 「比べて分かる！日中韓のあれこれ」調査報告・ディスカッション②

6/15「気になる！東アジアのあれこれ」ディベート・ディスカッション

6/29「日本はこんなところ」アートマイル作成・プレゼン

9/7 中国語入門(四声、数字、あいさつ、基本表現、基本の文法)

9/15 台湾での高校交流アイスブレイク練習、台湾校外学習しおり作成役割分担

10/5 台湾校外学習しおり作成@図書館・PC、台湾高校生と Skype 交流

10/26 ふりかえり、活動報告映像撮影

11/2 活動報告会

○生徒の自己評価集計Ⅰ（回答数）

I. 以下の項目が実現できたと思うか。						
	横断的学習	探求的学習	活動目標の把握	主体的課題発見	主体的思考判断	主体的学習
肯定	21	20	17	17	19	18
否定	1	2	5	5	3	4

○生徒の自己評価集計Ⅱ（回答数）

II. 以下の項目について学習成果があったと思うか。						
	学び方・考え方を学ぶ	在り方・生き方を考える	課題発見力を高める	課題解決意欲を高める	解決への創造性を高める	解決への協働指向を高める
肯定%	19	20	17	20	19	20
否定%	3	2	5	2	3	2

○実践内容の課題と提言

本講座は、「日本を知る」と「問題を発見する力の養成」の学年統一テーマとともに、12 月に実施される台湾校外学習のコアメンバーを養成することも目的として実施した。1学期は日本・台湾を含む東アジア諸国を題材として、ブレインストーミング、ウェビング、ディスカッション、ディベートなどの生徒の主体的な活動を通して自文化・異文化理解に努めた。東アジア諸国と日本との共通点や違いなど多方面からの話題を議論することで、改めて自国の理解や外国への興味を喚起することにある程度寄与できた。2学期は台湾校外学習に向けた準備の実働部隊として、主にしおりの作成に取組ませた。作業が中心となるため、「問題発見」とは異質な活動に終始してしまうため、しおりのページ割振り、編集作業などほとんどの工程を生徒に一任し、自ら問題(課題)に向き合う場面を設定した。

○プロジェクト名：5. 物語の深層～文献学基礎論～

○具体的な活動内容

本講座は郷土の物語を収集し他の物語との比較や分析を通して、自分たちの文化の「意外」な成り立ちについて考えること、また、知的好奇心に基づいて興味をおぼえたことを課題として「発見」する喜びを体験してもらいたい、というのが出発点であった。そこに3年次の卒業研究を見すえた学習として情報の探し方や多数の視点から情報の分析的な見方を身に付けるための演習としても機能すれば、という考えのもとに授業を構想した。展開として、最初に『白雪姫』、『イザナギとイザナミ』、『桃太郎』、『花咲か爺』などの生徒になじみ深いと思われる物語に機能や構造などの観点から情報の整理と比較を行い、その中の意外な共通点や成り立ちの疑惑などを抜き出して見せた。その後、教員持ち込みの数話を演習形式で生徒に情報の整理と抜き出してもらうことで、ある程度の習熟をはかった。その上で自分たちの郷土の物語の収集と整理までをグループワークとして行い、整理・考察をミニリポートとして個人の課題として課し、発表会を行った。

○生徒の自己評価集計Ⅰ（回答数）

I. 以下の項目が実現できたと思うか。						
	横断的学習	探求的学習	活動目標の把握	主体的課題発見	主体的思考判断	主体的学習
肯定	18	16	14	15	16	15
否定	3	5	7	6	5	6

○生徒の自己評価集計Ⅱ（回答数）

II. 以下の項目について学習成果があったと思うか。						
	学び方・考え方を学ぶ	在り方・生き方を考える	課題発見力を高める	課題解決意欲を高める	解決への創造性を高める	解決への協働指向を高める
肯定	20	16	12	18	18	20
否定	1	5	9	3	3	1

○実践内容の課題と提言

自己評価の結果を見てみると、「学び方・考え方」、課題「解決」系統の質問項目と目的や課題「発見」系統の質問項目の自己評価に明らかな隔たりがある。どうやら生徒の意識は前者に向かって、後者―「未だ顕在化できていない自分たち自身の問題意識や課題の発見に関して、この授業は寄与するところがない」というのが4割程度の生徒の率直な感想のように思われる。これは授業者の当初の意図とは全く反対の結果で、生徒の意識付けがうまく機能しなかったと考えるべきだろう。本来、「課題」ははっきりとした「課題」として現前するわけではなくて、それについて考える（つまり整理や比較や分析といった思考実験）行為を経て、「課題」として形成されるはずだが、この相補する関係への意識付け、あるいは演習が欠けていたところに本講座の欠点があった。また、このことは例年の3年次の「卒業研究」において、あいまいとした課題（目的）のまま研究が進むことや、あるいは「調べ学習」に終始してしまうといった問題にも通ずるように思う。同年次の卒業研究への課題としたい。

○プロジェクト名:6. 震災以降の東北を考える 3.0

○具体的な活動内容

本講座のタイトルは、震災後 3 年目を迎えたこと、また支援や復興のフェーズが、緊急支援的な第1期、ライフラインや共同社会の復旧支援の第 2 期から、住民の自立やコミュニティの再構築、地域ブランディングなどを重点化する第 3 期へと移行したとし、〈3.0〉とした。講座では、まず、震災時になにが起きていたのかを津波の映像や当時のニュース動画を確認し、被災された方の当時の証言などを紹介した。また被災地支援としてどういうボランティアが被災地に入って活動しているかの調査を行わせた。あわせて生徒たちは被災した子どもたちの教育をサポートしている NPO 法人に寄付するための街頭募金も行った。被災地支援をする高校生団体や福島を支援するボランティアの話を聞く中で、長期休暇を利用し、自分の目で実際の福島を見たいと思った生徒たちが有志で福島やその他の被災地に行ったようだ。また埼玉県にある双葉町の避難所(2013年12月閉鎖)の自治会長に電話でインタビューしたり、被災した自治体の現在の取り組みなどを調査したりした。それらを壁新聞としてまとめ、グループごとに発表会を行った。

○生徒の自己評価集計Ⅰ(回答数)

I. 以下の項目が実現できたと思うか。						
	横断的学習	探求的学習	活動目標の把握	主体的課題発見	主体的思考判断	主体的学習
肯定	16	16	15	17	18	17
否定	3	3	4	2	1	2

○生徒の自己評価集計Ⅱ(回答数)

II. 以下の項目について学習成果があったと思うか。						
	学び方・考え方を学ぶ	在り方・生き方を考える	課題発見力を高める	課題解決意欲を高める	解決への創造性を高める	解決への協働指向を高める
肯定%	17	15	16	13	15	18
否定%	2	4	3	6	4	1

○実践内容の課題と提言

集計を見る限りでは、全体的に肯定的だといえる。生徒の傾向として wikipedia で安易に調べがちだが、自治体や各省庁のサイトの見方や、web 情報の根拠(信ぴょう性)の確保を教えることで、生徒たちは自由かつ主体的に様々な情報を取り出して精査することができるようになった。そして自発的にグループで情報共有しようとする動きが見られた。アンケートでは〈主体的〉や〈協働〉のポイントが高く出た。逆に、テーマが社会や地域、災害といった広範囲なものだったため、そこに身近さを感じることがなかなか難しく、問題解決という面においては十分に学習成果につなげることができなかった。〈解決〉や〈生き方〉のポイントが低いことがそれを表している。ただ、そうした社会の大きな枠組みに対して、または現在の自分では消化しきれない問題に対しても、意識を向けようとすることは市民力として大事なことであり、本講座としては一定の意義があったと評価できるのではないだろうか。また上記にはないが、生徒の自己評価アンケートにおいて、満足度が著しく高かったことも追記しておく。

○プロジェクト名：7.日本のスポーツ文化を考える

○具体的な活動内容

4月、5月：日本のスポーツ文化についての学習を行う。特に日本はスポーツ競技の基本としてラジオ体操が全国的に普及している。このラジオ体操はどのように作られ体のどの部分を鍛えているかについて実践しながら学習した。

6月からは、「なんば歩き」について体験実践の学習を行う。そう運動の歴史を紐解いたときに「飛脚」が取り上げられるが、なぜ彼らは長い距離を休むことなく継続できたのかについて、なんば走りを経験しながら学習した。

9月からは自分の専門としている競技や、自分が調べたい競技について日本と海外の比較をしながらそれぞれ独自に調査研究を行った。

○生徒の自己評価集計Ⅰ（回答数）

I. 以下の項目が実現できたと思うか。						
	横断的学習	探求的学習	活動目標の把握	主体的課題発見	主体的思考判断	主体的学習
肯定	16	17	18	15	19	18
否定	5	4	3	6	2	3

○生徒の自己評価集計Ⅱ（回答数）

II. 以下の項目について学習成果があったと思うか。						
	学び方・考え方を学ぶ	在り方・生き方を考える	課題発見力を高める	課題解決意欲を高める	解決への創造性を高める	解決への協働指向を高める
肯定%	19	17	12	17	16	16
否定%	2	4	9	4	5	4

○実践内容の課題と提言

総合的学習の時間の主題は「日本を知る」ということが基本テーマのため、日本のスポーツの歴史を調べたり外国のスポーツの歴史を調べたりして日本との比較した。

だだそれだけでもスポーツの構成要素や、歴史的に見た競技の成り立ちなどを考えることができ改めて振り返ることや新しく発見することができたのではないだろうか。

しかし、どうしても調べ学習が主となるためにインターネットや書物からの情報だけになってしまった。実際に海外に出向きその国のスポーツについてじっくり見学して学習できたらもっと深く感じることができて、考えることができたように思う。

日本のスポーツは学校体育が主となって発展しているが、海外は違った形で発展を遂げている。このような点は社会的は池を見る点で是非とも実際にその国で調べることができれば、意義あるものとなるのではないだろうか。

○プロジェクト名：8.日々の生活（衣・食・住）について考える

○具体的な活動内容

このプロジェクトでは、少し広めのテーマである「生活」、中でも衣食住に関わることについて、自分自身の生活を見つめることで、今の自分に関わること、日本のことについて知り、その中で身近な問題を発見していくことを目標とした。

1学期テーマ：自分の生活を見つめ、今の日本の衣食住について考える。そのために、教員から

ウェビング・・・生活／調理実習・・・飾り寿司とすまし汁／日本のだし文化について考える／

日本文化を知ることができる見学先を探す～自分の興味関心のあることを他人に伝える～／

日本を紹介する～紹介できるように調べ、伝える～

2学期テーマ：生活の中で自ら問題提起し、考えてみる

見学先プレゼンで決定した見学先へ。草加煎餅丸草一福本店を見学

日々の生活（衣食住）の中から私の気になることを調べ、伝える

○生徒の自己評価集計Ⅰ（回答数）

I. 以下の項目が実現できたと思うか。						
	横断的学習	探求的学習	活動目標の把握	主体的課題発見	主体的思考判断	主体的学習
肯定	16	17	16	15	16	18
否定	5	4	5	6	5	3

○生徒の自己評価集計Ⅱ（回答数）

II. 以下の項目について学習成果があったと思うか。						
	学び方・考え方を学ぶ	在り方・生き方を考える	課題発見力を高める	課題解決意欲を高める	解決への創造性を高める	解決への協働指向を高める
肯定%	16	16	16	14	15	16
否定%	5	5	5	7	6	5

○実践内容の課題と提言

テーマが衣食住ということで、枠組みが大きかったため、活動目標のとらえ方や意欲にもばらつきがあり、取組の状況も生徒による個人差が大きかった。初回の授業で、生徒の興味関心を探ったところ、幅が広かったため、教員側で絞り込むことはせずに、それぞれの興味関心に沿って進めていくことを大切にした。そのため自らの追究していく姿勢は育むことができた。しかし、時間的な制限や生徒への指導助言を十分にできなかったことにより、あまり成果は上がらなかった。身近な事柄から調べ、考えていくことは取り組みやすいが、モチベーションの低い生徒の底上げや調べ学習で終わらないよう実際に何かできるような工夫がもっと必要だった。見学や体験を校外に出てやらせたいと試みたが曜日と20数名での受け入れ先を探すのは難しかった。